

2026. 2. 8 (日) 使徒28:30～31

28:30 パウロは、まる二年間、自費で借りた家に住み、訪ねて来る人たちをみな迎えて、
28:31 少しもはばかることなく、また妨げられることもなく、神の国を宣べ伝え、主イエス・キリストのことを教えた。

<説教>

ルカが書き記した「使徒の働き」は、パウロがローマに到着してすぐの二年間のことが短く記されて終わっています。パウロがローマに連れて来られたのは、パウロがユダヤ人たちからの訴えを皇帝カエサルに上訴したからでした(25:11)。なのに、そのことについては何も触れられていません。ちょっと不思議な感じがします。しかし、1章の始めはこうでした。〈テオフィロ様。私は前の書で、イエスが行い始め、また教え始められたすべてのことについて書き記しました。それは、お選びになった使徒たちに聖霊によって命じた後、天に上げられた日までのことでした。イエスは苦しみを受けた後、数多くの確かな証拠をもって、ご自分が生きていることを使徒たちに示された。四十日にわたって彼らに現れ、神の国のことと語られた〉(1:1-3)。このようにルカはその福音書の続きとして「使徒の働き」を書きました。それで、「生きているイエス・キリストが、ご自分が始められた行いと教えを、ご自分のからだである教会を通し、使徒たちを通して、聖霊によってお続けになったことをルカが書き記したのが『使徒の働き』です。」と最初に学んだことでした。ですから、先主日も見たことですが、パウロが〈神の国を宣べ伝え、主イエス・キリストのことを教えた〉ことでこの書が終わるのは自然というか、当然のように思います。

ローマに入ったパウロは、監視の兵士つきではありましたが、一人での生活が許されました(16)。その期間は〈まる二年間〉(30)でした。〈自費で借りた〉とありますので、その獄屋だった家の中で再び天幕作りもしたのかもしれません。またはローマの、またはその他の教会からの支援もあったとも考えられます(cf. ピリピ 4:10)。

自由な外出は許されなかったパウロはその間ひたすら〈訪ねて来る人たちをみな迎えて〉、福音を宣べ伝え、教えました。更にはその家の中で、「エペソの教会」「ピリピの教会」「コロサイの教会」「ピレモン」へのそれぞれの手紙もパウロは書きました。たとえ外に出ることができなくても、訪ねて来る人たちをみな迎えるという、自分ができる仕方でパウロは福音を宣べ伝えました。ピリピ人への手紙ではこうも言っています。「さて、兄弟たち。私の身に起こったことが、かえって福音の前進に役立つことを知ってほしいのです。私がキリストのゆえに投獄されていることが、親衛隊の全員と、ほかのすべての人たちに明らかになり、兄弟たちの大多数は、私が投獄されたことで、主にあって確信を与えられ、恐れることなく、ますます大胆にみことばを語るようになりました」(ピリピ 1:12-14)。監視役は皇帝カエサルの親衛隊の兵士でしたが、彼らも否が応でもパウロが語る福音を聞くことになったのです。そして、そんなパウロの姿は、獄屋の外にいる多くのキリスト者たちの励まし、慰め、模範となりました。彼らを通してローマに福音が宣べ伝えられて行きました。

パウロが〈神の国を宣べ伝え、主イエス・キリストのことを教えた〉その有り様は〈少しもはばかることなく〉でした。〈はばかることなく〉とは「大胆に」(新改訳第3版)

ということです。〈はばかることなく〉と訳したので〈少しも〉と言うことになったのでしょうか、「大胆に」ということならここは直訳すると「全ての、あらん限りの大胆さで」となります。〈キリストのゆえに投獄されている〉と言うと、何か「それでは世の人たちに悪い印象を与えてしまい、証にならない」みたいに考えるキリスト者たちもいるようですがそんなことはありません。きちんと信仰によって、その良心によってキリストに従い、キリストのみこころを行って捕まり、投獄されるのなら何も恥じることはありません。もちろん罪深い人間なのですぐ恥ずかしく思いがちでしょう。だからパウロのような大胆さは「人間の自然な心」からは得られません。それはみことばと聖霊の力によらなければ得られませんし、祈りによらなければ得られません。パウロはもちろん自分自身で必死に祈ったことでしょう。そして教会にも自分のために祈ってくれるように願いました。「また、私のためにも、私が口を開くときに語るべきことばが与えられて、福音の奥義を大胆に知らせることができますように、祈ってください。私はこの福音のために、鎖につながれながらも使節の務めを果たしています。宣べ伝える際、語るべきことを大胆に語れるように、祈ってください」(エペソ 6:19-20)と。

そしてパウロは〈妨げられることもなく（「少しも」が新改訳第3版ではこちらにかかっています）〉福音を宣べ伝えました。これはかつてのパウロの福音宣教、伝道旅行の様子からすると驚きです。「使徒の働き」から学んで来たように、パウロの宣教にはその最初から「妨げ」がつきものでした。すぐにユダヤ人たちが反対し、嫉み、口汚くののしり、迫害しよう、追い出そう、捕まえよう、殺そうなどとして来ました。また異邦人たちもその偶像を持ち上げて反対運動を起こしました。しかしこの〈まる二年間〉はそんな妨害がなかったのです。そんなに長い間、妨げがなかったのはパウロにとっては初めてだったでしょう（同時に最後でもあったかもしれません）。それは〈監視の兵士〉がいたおかげもあったでしょう。しかしそれは何よりもこれまでの労苦、苦闘に対する主イエス・キリストからの「報い」でまいったと思います。パウロはこの後一旦釈放された後、再び捕られ、ついには殉教することになります。しかし確かにその前に主は「二年間は妨げなし」といういわば「ご褒美」をくださり、次なる労苦、苦闘への「力備え」をさせてくださったのではないかと思います。すべては主のお恵み、あわれみのゆえでした。

このように、「獄中」に置かれながらも〈まる二年間〉〈訪ねて来る人たちをみな迎えて、少しもはばかることなく、また妨げられることもなく、神の国を宣べ伝え、主イエス・キリストのことを教えた〉パウロの力は「神のことば」、主イエス・キリストから受けたものでした。後の拘束中に記した手紙にはこうあります。〈この福音のために私は苦しみを受け、犯罪者のようにつながれています。しかし、神のことばはつながれていません〉(IIテモテ 2:9)。聖霊とともに働く〈神のことば〉に力があります。

〈神のことば〉を受けた者は、私たちも、〈神の国〉の王〈主イエス・キリスト〉の力によって〈神の国を宣べ伝え、主イエス・キリストのことを教え〉ます。それは〈訪ねて来る人たちをみな迎えて〉かもしれないし、「外に出て行って」かもしれません。〈少しもはばかることなく〉、これはいついかなる場合も必要です。〈(少しも) 妨げられることもなく〉、これはそうあってほしいと願いつつも、いつもそうではないでしょう。いやむしろ何らかの妨げがあると覚悟していることがむしろ必要でしょう。いずれにせよ、パウロは言います。「神の御前で、また、生きている人と死んだ人をさばかれるキリスト・イ

エスの御前で、その現れとその御国を思いながら、私は厳かに命じます。みことばを宣べ伝えなさい。時が良くても悪くてもしっかりとやりなさい。忍耐の限りを尽くし、絶えず教えながら、責め、戒め、また勧めなさい」（Ⅱテモテ 4:1-2）。

「使徒の働き」からの説教は終わります。しかし「神の国の王、主イエス・キリスト」に聞き従う「私たちの働き」はこれからも生涯をかけて続きます。